

## ベルクソン哲学における「持続」概念の変化

—カント哲学の批判的受容という動機にてらして—

村上 龍

本稿では、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（一八五九―一九四一年）の術語体系の一定の変化がカント哲学の批判的受容の意図と表裏一体であった点を検証し、それによって、ベルクソン哲学がじつはカント哲学とのあいだにたしかな連続性を有することを明らかにしたい。ここでいう術語体系の変化とは、処女作『意識に直接あたえられたものについての試論』（一八八九年）（以下、『試論』と略記）から第三主著『創造的進化』（一九〇七年）にいたるまでの「持続」概念の変化、わけでも「空間」概念との関連におけるそれをさす。また、カント哲学の批判的受容については、カント的枠組をふまえてついでゆる物自体の認識可能性を回復しようとする意図が問題となる。なお、考察にさいしては、生前に刊行された諸著作のみならず講義録等の補助的資料も積極的に活用する。

先行の哲学史にたいするベルクソンのまなざし、および、それが自身の思想にもたらす反作用については、そうじてあまり研究がすすんでいない。その理由はなにより資料の不足に帰せられよう。まず、ベルクソンの著作はおしなべて歴史研究を主眼とするものではないし、ついで、いっそう致命的なことに、かれは遺言のなかで、生前に公にされなかった一切の原稿、おぼえ書き、書簡、そして聴講者による講義の記録の出版を「断固として禁じ」てしまった（1）。

この事情は、ベルクソンの主要な仮想敵の一人と目されるカントの場合にもあてはまる。諸著作からうかがえるように、

ベルクソンは物自体を認識不可能と断ずるカントを一貫して敵視しながら (D.I. 151-153; M.M. 162-163; 320-321, 346, 361, E.C. 668-672, 797-800, P.M. 1269-1270, 1306-1307, 1312, 1364, 1374-1377, 1393, 1427-1431) 必ずからはいわば物自体にまでとどく認識方法としての「直観」概念をたずさえて、自由な自我、靈魂の不滅性、世界をつらぬく生成の原理、神などを積極的に論じた。それゆえ、両者の思想内容上の差異と、場合によっては類似に着目する、そうした意味での比較研究にもこれまでで一定の蓄積がある<sup>(2)</sup>。しかしながら、ベルクソン特有の諸概念がカントのそれとのあいだに有する接点とはいえば、じっさいのところ、もっぱら公刊された著作に拠るかぎりこれをはっきりよみとることができない。ベルクソンがカント哲学をどのように受容、批判し、そのうえでいかにして自身の思想をそだてたのか、その経緯をつまびらかにしようとすれば、従来、やはり資料のうえで限界があったのである。

だが、二〇世紀の終盤以降、原資料をめぐる上述の状況は一変しつつある。このところ、リセや高等師範学校、コレージュ・ド・フランス等における講義の記録、あるいは私信といったあらたな資料がつきつきと公にされている。資料体のこうした増加は、ベルクソンによる哲学史の理解と彼自身の思想とのあいだの相関関係にかかわる研究をおおいに進展させるはずである。というのも、『ベルクソン講義録』全四巻の編者アンリ・ユードがいみじくも述べるとおり、哲学史へのまとまった言及を豊富にふくむこれら資料は、「かれがなにを知っており、どのていど知っており、またいかに理解したか」をよく教えてくれるからである (C.III. 268)。むろん、新資料の価値を過大にみつもってはなるまい。とはいえ、とりあつかいに注意し、つねに諸著作と照らしあわすよう心がけるなら、それは死後集成された『雑録集』ともども、著作を肉づける有効な補助線となろう<sup>(3)</sup>。補助的資料を積極的に活用することによって、カントとの対話をつうじてベルクソン哲学が成立する、そのダイナミズムの一端を解明しようともくるむ本稿は、このような問題関心に立脚する<sup>(4)</sup>。

以下、第一節では、ベルクソンが「直観」概念を固有の認識方法として確立する二〇世紀初頭までの主要な著作、論文を年代順にとりあげ、「持続」概念にかんする記述を、とくに「空間」概念との関連に着目して検討する。第二節では、カン

トへの批判的言及、とりわけ物自体の認識可能性にかかわるそれに注目しつつ、やはり年代順に、一九世紀末から二〇世紀初頭の講義の記録等と、第一節でとりあげた著作、論文とを読みあわせる。一連の考察をつうじ、カント的枠組を前提としてひきうけたうえで、その肯定的な側面と否定的な側面とをみさだめながらあらたな展開を模索する、著作からだけではなかなかみえてこないベルクソンの思考の軌跡がうきぼりになるだろう。

## 第一節 「持続」概念の検討―「空間」概念との関連をめぐって―

ここでは、処女作『試論』、第二主著『物質と記憶』（一八九六年）、論文「形而上学序説」（一九〇三年）、『創造的進化』を順にとりあげる。

### 一・一 持続と空間の峻別―「意識に直接あたえられたものについての試論」―

『試論』の序文によれば、「一定の諸問題がひきおこす克服しえない困難」は、「拡がりのないもの (inintendu)」と「拡がり (tendu)」、「質」と「量」との不当な「混同」に由来する (D.I. 3)。じっさい、ベルクソンは本著作において、内なるものと外なるものとのそうした混同を徹底してしりぞける。

外的経験について、空間を感性のア・プリオリな形式とするカントに同意しながら (D.I. 62-64, 154)、ベルクソンは空間を「たがいに区別された諸項が配列される等質の環境」と規定し (D.I. 147)、さらには、区別や分割の原理としてのその空間を、「明確な区別をおこない、かぞえ、抽象し「…」はなす」といった「人間の知性」のはたらきの準拠枠とさえみなす。しかし、内的経験の形式である時間にかんしてはカントに同意せず、時間を、そこにおいて順にさまざまな「意識の諸

状態が展開される、「空間同様に「等質で無規定な環境」とする考えかたに異をとなえる (D.I. 66)。あらかじめ「諸項を区別し、ついでそれらの占める場所を比較する」のでなければ、すなわちそれらを「並置」するのでなければ、「継起の順序やこの順序の可逆性」を語ることはできないだろう。してみると、意識の諸状態が順に継起する環境として時間をとらえるとき、じつは時間を、たがいに区別された諸項が配列される等質の環境としての「空間に投影」してしまっているのである (D.I. 68)。

これにたいし、ベルクソンは時間の真のありようを、メロディーの継起的な知覚を例にとって説明する。「メロディーのうちの一拍を不当に強調する」とき、「われわれにあやまりをつけ知らせるのは」、その一拍の「ゆきすぎた長さ」自体というよりむしろ「それによって楽節全体にもたらされた質的变化」であろう。とすれば、メロディーの各音に対応する諸々の意識の状態は相互に孤立することなく、緊密に連携しあって一つの全体を構成するとみられる。このことから、ベルクソンは時間のうちに「諸要素の相互浸透、連携、内的有機化」をみとめる (D.I. 68)。そして、たえず「全体のあらたな有機化」をもたらす統一の原理としての時間のこうしたありさまを (D.I. 82)、「持続となづけるのである。

このように、「相互外在性なき継起」としての持続と「継起なき相互外在性」としての空間を (D.I. 72-73, 149)、「あるいは統一の原理としての持続と、知性の準拠枠でもある分割の原理としての空間を独自に規定しなおしたベルクソンは、一方で持続の空間化をいましめ (D.I. 51, 66, 68-69, 74, 81, 83-85, 92, 103, 126, 130, 144-145, 148-156)、「他方で外界に持続をみとめることをいっさいひかえし (D.I. 75, 77, 80, 137-138, 148-149)、「両者をきびしく峻別する。

## 一・二 媒概念としての緊張と延長―『物質と記憶』―

ところが、第二主著『物質と記憶』では、ベルクソンは「拡がりのないものと拡がり、質と量の和解」を模索しはじめ

(M.M. 318) そのなかではやくも、かつて厳然と切りわけたはずの「持続」概念と「空間」概念を接合する観点が示唆される。

第一に、質と量は「緊張 (tension)」概念をつうじて和解する (M.M. 319)。われわれはかずおおくの現象がひとまとめに「凝縮」される「特定のリズムをもった持続」を生きており、たとえば、短時間のうちに無数の「継起的な振動」をくりかえす赤色の光についてわれわれは単一の質をしか覚知しない。かりにそのリズムをゆるめて諸振動に逐一たちあえたとしたら、すべての振動をみとどけるのに莫大な時間を要するだろうが、それとともに、時間の延長分におうじて赤色の感覚中の質的成分はかぎりなく希薄化するだろう (M.M. 340-342)。このような推論をへてベルクソンは、「物質と十分に発達した精神とのあいだ」に「持続の緊張」の「無数の度合い」を設定し (M.M. 355)、いわゆる量的なものを、きわめてゆるやかな持続のもとで「實際上無視できる」ていどにまで「うすめられ」た質とみなす (M.M. 319)。

第二に、拡がりのないものと拡がりは「延長 (extension)」概念を介して和解する (M.M. 319)。ベルクソンのみるところでは、「われわれのすべての感覚がなんらかの度合いで拡がっている (extensives)」との発想が「現代の心理学」にますます浸透しつつある (M.M. 350-351)。かれはそうした知見にささえをえて、「われわれにあたえられるもの」とは本来、「分割された拡がり」と純粋に拡がりのないものとを仲介するようななにかであるにちがいないと考え、それを「延長」となづけるのである (M.M. 374)。

このように、『物質と記憶』においてベルクソンは、「緊張」および「延長」の両概念を介して、一方で外界にも持続をみとめ、他方で内界をもならか拡がりにあずからせる。「精神」の「統一」から「分割可能な物質」へくだりつつ、同時に後者から前者へのぼろうというわけである (M.M. 317)。ただし、そのようにして両者をあゆみ寄らせるさい、ベルクソンは物質を、分割の原理たる等質的空間とはあくまで区別してゐる (M.M. 318, 323, 341, 343-347, 351-354, 374)。したがってここでは、「持続」概念と「空間」概念の接合は、その可能性をひらかれながらもいまだ果たされていないといふべきである。

### 一・三 「緊張」概念の体系化―「形而上学序説」―

論文「形而上学序説」は、知性の「自然な性向」を「反転」し持続にそくして認識する方法として（P.M. 1420-1422）、ベルクソンが「直観」概念をはじめて明確に提示した論考である。その点をかながみれば意外なことに、ここでは上の媒概念のひとつである「緊張」概念が体系化される。

みずからの内なる持続に「身をすえる」とき、われわれは、「無数の可能な持続のあいだでのひとつの選択」のように感じられる「まったく特定の緊張」をおぼえるだろうとベルクソンは言う（P.M. 1417）。そして、色彩の「スペクトル」になぞらえながら、上限の「生ける永遠」から「物質性の定義となろう」「純粹な反復」もしくは「純粹な等質」まで、「緊張」の度合いにおうじた諸々の持続の系列をかれは語るのである（P.M. 1419）。持続の緊張という論点をめぐるところでの議論は、おおむね『物質と記憶』のそれをひきつぐものとみてよい。しかし、弛緩の極限としての物質性を「空間」概念にもつじじる純粹な等質性によって定義することで、「持続」概念と「空間」概念を接合する可能性はここでいっそうひらかれたといえる。

### 一・四 持続と空間の接合―『創造的進化』―

第三主著『創造的進化』においても、空間を知性の準拠枠とみなすベルクソンは（E.C. 638）、知性とは対照的な持続にそくする認識方法として直観をたてる（E.C. 645-646, 721-722, 784-785）。ところが、やはり意外にもというべきか、本作において「持続」概念と「空間」概念はついに十全に接合されることになる。

「もっとも内的」な地点で「持続」に「もぐりこめ」ば、過去の全体を「不可分」なまま現在へ「おしいれる」人格が「極

限まで緊張」するのを感じるだろう (E.C. 664-665)。ベルクソンは、「そうやって「さまざまな部分」を「相互浸透」させ「集中」する人格の持続の上方に、これら個々の人格がそこからの「減衰」でしかない (E.C. 696)、いっそう緊張した「超意識」を想定する一方 (E.C. 703, 716)、「緊張をゆるめ」た人格が「相互に外在的なく千もの記憶」に「分散」する、そのくんだりゆくかたむきを「延長 (extension)」とよびながら、これを「よりとおくへおし進め」たさきに外的な「拡がり」を、そして「終端」には「幾何学の空間」を想定する (E.C. 666-667)。延長 (extension) とは内的持続の弛緩、いかなれば脱緊張 (ex-tension) であり、空間こそその理想的極限だというわけである。

このように、『創造的進化』においてベルクソンは、持続と拡がりの両極にまたがる「延長」脱緊張「概念を介して、統一の原理である持続と分割の原理である空間とを接合する。『物質と記憶』で導入された二つの媒概念の一方を他方の反転とみなし、一なる持続より多なる空間への段階的な分散を論じることで<sup>(5)</sup>、かれはさいしょに『試論』でさだめた両原理の本性上の差異を度合いの差異に変換したのである。

## 第二節 ベルクソンによるカント批判―物自体の認識可能性をめぐる―

ここでは、前節でも考察の俎上にあげた『試論』、「形而上学序説」、『創造的進化』のほか、パリのリセ、アンリ四世校でおこなわれた「心理学講義」(一八九二―一八九三年)と『純粹理性批判』についての講義(一八九三―一八九四年)、ならびに、フランス哲学会における討論の記録「心理・生理平行論と実証的形而上学」(一九〇一年)をあわせてとりあげて、カントへの批判的言及、とりわけ物自体の認識可能性にかかわるそれに注目しつつ、やはり年代順に検討する。

二・一 二元的世界観の反駁―『意識に直接あたえられたものについての試論』―

内界と外界の混同に由来するさまざまな哲学的難問のうち、『試論』がとくに焦点をしぼるのは「自由の問題」であった(DI. 3)。ところで、ベルクソンは結論部において、空間化された時間ならぬ真の時間としての持続の観点にたつことではじめて自由な自我の認識可能性が確保される旨をあらためて確認するさい、じつはカントに批判的に言及しながらそうしている。

かれ「カント」は、意識が心理的な諸事実を、並置以外のしかたでは覚知できないと判断した。「…」そのためかれは、同一の物理的現象が空間のなかで反復されるのとおなじく、意識のふかいところでもおなじ状態が反復されうると信じるにいたった。これはすくなくとも、因果関係に、外的世界におけるのと同様の意味や役割を内的世界のなかでもあたえたときに、かれが暗黙のうちにみとめていたことである。それゆえ、自由は理解のできない事実となった。だが、それにもかかわらず「…」かれは自由をゆるぎなく信じていた。そこでかれは、自由をヌーメノンの高みにまつりあげた。かれは持続を空間と混同していたので、じっさいには空間とは無縁のこの実在する自由な自我を、持続にたいしても同様に外的な、したがってわれわれの認識能力をうけつけない自我にしてしまったのである。「…」かしながら、われわれはつねに、諸瞬間がたがいに内的にして異質的であるような純粋な持続に身をおきなおすことができる。そこにおいては、ある原因がみずからの結果を再現することはないだろう、というのも、そもそもそれ自身がけっして再現されないだろうから(強調は引用者による)(DI. 151-152)。

カントは「持続を空間と混同」したため、「心理的な諸事実」が外界の「物理的現象」とおなじく「反復」可能だと考え、

「内的世界」にも「外的世界」と同様の「因果関係」を適用した。その結果、時間のそとでの内的経験をみとめないカントは、「自由な自我」を「われわれの認識能力をうけつけない」叡智界にまつりあげざるをえなくなる。これにたいし、「純粋な持続」にたちかえるならもとより反復可能性など問題たりえない。全体がたえずあらたに有機化し、刻々と「異質的」なものへ変化しゆく持続においては、おなじ瞬間が「再現」されることがないからである。とすればこのとき、あくまで時間にとつた内的経験の範囲内で自由を語るための道筋もひらかれるだろうとベルクソンは考えるのである。

このように『試論』において、自由な自我を叡智界にしまいこむカントを論難するベルクソンは、みずからは持続の観点にたつて、あるいは持続と空間の峻別をつうじて、自由の認識可能性を確保する。だが、いくつかの証言をみるかぎり、ここでのカント哲学への参照はかれの本意ではなかったようである。たとえば、作家シャルル・デュボスが書きとめた一九二二年二月二日の対話の記録によると、ベルクソンは「一八八四年から一八八六年にかけて」書きあげた『試論』の「初稿」では、「さしておおきな影響」もうけていない「カントのことを考慮にいれていなかった」<sup>(6)</sup>。しかし、「当時の教員たち（Université）の目にかかれは」「この遺漏」は「博士論文」の「完全な失格」につながるだろうことに気づき、あとで修正をほどこしたのだという<sup>(7)</sup>。

## 二・二 度合いをつうじた自由と必然性の一元化―「心理学講義」―

ところが、その数年後におこなわれた「心理学講義」では、カントと本格的に対話しようとする姿勢があらわれる。

編者ユードが適切にも注記するとおり、『試論』の自由をめぐる議論の「要約」ともよべる本講は、ただし、それなりの頁数をさいて設けた「カントの研究」のための一節<sup>(8)</sup>において独自の面をみせる(C-II. 465)。

「あらゆる必然性の原型そのもの」である「因果性」を自然に、すなわち、時間と空間をつうじあたえられる現象の総体に課すカントは(C-II. 257)、その一方は、「無カラさいしょの項を」「創造する」がごとく「一つの系列を絶対的に開始させる力」として規定された自由を感性界の外におく(C-II. 258)。ベルクソンの考えでは、カントがそのように必然的な自然と自由な自我とにそれぞれ「絶対的にことなる領域をあてが」ったのは(C-II. 259)、「絶対的な自由」や「絶対的な必然性」ばかりを念頭においていたためである(C-II. 263)。

この点にかんして、ベルクソンは「自由における諸々の度合い<sup>(9)</sup>、必然性における諸々の度合い」という観点の導入を提案する(*ibid.*)。

じっさい、絶対的な自由がひとつの系列を絶対的に開始する力だとしても、**相・対・的・も・し・く・は・部・分・的・な・自・由・な・も・の・が・存・在・し、**それはけっして到達できない極限として絶対的自由をめざす。「…」それは絶対的に一つの系列を開始するものではないが「…」ただしその系列に、まさにみずからの活動の結果であるところのあらたな方向を刻印する。「…」本来の意味での自然のなかで「…」われわれがであう必然性についていえば、それはカントがのぞむほどの厳密さからはほどとおい「。…」自然のなかに統一が存在するうえで「…」いかなる結果もその先行者によりまったく決定されるなどということは必須でない。結果が先行者によってひかれた一定の限界をはみださないこと「…」予見が可能であること、これが必要かつ十分である。ただしその予見は、低次の部類の諸現象や、存在のもっともひくい諸段階にかんして

はたしかだが、よりたかい部類の事実についてはたんに蓋然的なものとならう。したがって「……自由に度合いがある  
のと同様、諸現象の必然性と科学の確実性にも度合いがある。一つの科学があるのではなく、諸々の科学があるのだ  
(強調は引用者による) (C-II. 263-264)。」

一方で、無カラ「ひとつの系列を絶対的に開始する」にはいたらないまでも、すでに存在する系列に「あらたな方向を刻印する」「部分的な自由」。他方で、「結果が先行者によってひかれた一定の限界をはみださない」かぎりでゆるめられた必然性と、その緩和の「度合い」に相応の「確実性」をそれぞれにそなえた複数の「科学」。そのうえでベルクソンは、「存在の低次の諸形態をおそらくは支配している絶対的な必然性と、一つの理想でしかない純粹な自由とのあいだに「……無数の仲介的な度合い」を想定し (C-II. 299)、自由と必然性のあいだの厳密な三元性を度合いの差異に変換する可能性を示唆する。

## 二・二・二 第三講「意識」

度合いをつうじた自由と必然性の一元化という論点は、うえの第九講と密接に関連する第一三講にもみられる。

カントは「純粹統覚」の概念をもって、「多様にして多数の諸現象」という「質料に悟性が課す統一」もしくは「形式」について論じた (C-II. 297)。ベルクソンは、カントがそのように「経験論に抗して」自己意識の統一性を重視した点を評価する (C-II. 298) (9)。ただし、カントにしたがうかぎり、この統一は「ヌーメノンとしての自我」ではない (C-II. 297)。というのも、カントが叡智界に位置づけるほんらいの自我は「知的直観のうちで覚知されるような、ようするに時間という条件から解放された統一」であるはずだが、ここで問題となっているのは、時間をつうじてあたえられた諸現象に課される統一でしかないからである (C-II. 298)。

ベルクソンのみるところでは、カントが純粹統覚をめぐるように「生きた統一」ならぬ「空虚な統一」をしか語らなかつたのは(II)、「必然性と自由のあいだに仲介者をみなかつた」せいである。「絶対的な自由」ばかりを考えるカントは、諸現象とかかわって必然性にひたされる経験的な自我に自由をみとめることができなかつた。だからこそ、かれは自身の語る形式をあくまで空虚な統一とみなし、自由なる真の自我を「時間の外に、意識にはまったく手のとどかないところ」においたのだとベルクソンは言う(C-II. 298)。

このように「心理学講義」において、認識の質料と形式を区別しともかくも自我の統一性を論じたカントに一定の評価をあたえるベルクソンは、そのような空虚な形式をこえて、カントの語りえなかつた真の統一性たる自我それ自体へと限定的ながらもせまるべく、科学の複数性にも言及しつつ、度合いをつうじてカント的な二元性をゆるめようとする。自身の立論を対置するばかりだった『試論』とはことなり、度合いという係争点をかかかって正面からカント哲学に相對し、これに修正をほどこそうとする生産的な姿勢がここからはよみとれる。

### 二・三 一から多への流出—『純粹理性批判』にじつづの講義—

「心理学講義」の一年後におこなわれた『純粹理性批判』についての講義では、ベルクソンはいま一步ふみこんで、『純粹理性批判』に「潜伏し、内包された」「ヌーメノンについての積極的な着想」をさぐりあてようとする(C-III. 173)。

「心理学講義」におけるのと同様、ベルクソンは、「精神がみずから直観の所与に課す形式」を「首尾よく規定」し「ほかのだれにもまして精神の自発性をうまくひきだした」として、まずはカントを評価する。ついでやはり、とはいえその精神の形式が「空虚で精彩のない統一」でしかなく、ゆえにカントは「それ自身であるかぎりの精神についてはなにも知りえ

ないと言うにいたった」ことを（C-III. 165）、ただしここでは、「さいしょに時間のなかで純粹な多性としてあたえられる諸現象」のもとへ精神の統一が「外からやってくる」という先後関係を強調しつつ指摘する。そのうえでベルクソンは、「ヌーメノンについてのこうした消極的な着想にカントが満足していたかどうか」と問いかけ、「われわれの思考のそれとはことなる」にしても「それ」[自我それ自体]をひとつの統一として「かれが思いついていたにちがいないと主張する（C-III. 173）。

それ「わたしの存在」自体に到達しようと仮定しよう。そのときわたしは、そのすべての頭れをうみだすかぎりで、現象をうみだすかぎりで、これをとらえることだろう。わたしは生きた統一のなかにおいて、この統一から諸現象が生じ、開花するだろう。それゆえ、まさに一から多へとわたしは向かうだろう。[∴]「カ」ントが思いつくような実在する存在の統一とは内的な統一であり、空虚で精彩のない形式のそれとはなんら似るところのない統一であって、そこから生じる多様な現象のなかの、いっさいの色彩や生命をうちに含む、そうした統一なのである。このように、わたしの自我は物自体であるかぎりでは、おそらく多様性へと開花する統一である（強調は引用者による）（C-III. 165）【°】

先行する諸々の現象にあとからおおいかぶさる「空虚で精彩のない形式」と対照的に、「生きた統一」にほかならぬそれ自体としての自我とは、「多様な現象」を潜在的に「うちに含」み、これらをみずからのうちより「うみだす」ものであるとベルクソンは言う。「そこから流出する感性的な多性にさきだ」つものとして（C-III. 166）、カントは自我それ自体を暗に構想していたというわけである。そして、ベルクソンの考えでは、なるほどカントの言うように「われわれが知的直観を有さないとしても」、カントに反して、この生きた統一はある種の直観においてたしかに経験される。なぜならば、「持続」する「我々の人格」は、じっさいに「ふかい直観」をつうじて「分割されざる全体として」あたえられるからである（C-III.

このように『純粹理性批判』についての講義において、多様な質料を流出させる統一という、カント哲学に伏在する自我それ自体の着想を抉りだしたベルクソンは、それに自身の「持続」概念を重ねあわせることによって、カントの否定した知的直観とは別種の直観の可能性を示唆する。度合いをつうじてカント的な二元性を一元化したあとで、こんどはこれを一から多への段階的な分散のシエマにあてはめつつ、自身の術語体系との接点をさぐるとうのである。

## 二・四 複数の科学―「心理・生理平行論と実証的形而上学」―

フランス哲学会における討論の記録「心理・生理平行論と実証的形而上学」では、度合いをつうじた自由と必然性の一元化という論点が、とくに科学の複数性という問題にそくして再度とりあげられる<sup>(12)</sup>。

ベルクソンのみるところでは、カントは科学一般をもっぱら「デカルト的機械論もしくはニュートンの物理学」のモデルで考えている。なるほど、カントのように科学を一枚岩的にとらえ、すべての現象が「ただひとつのおなじ平面のうえにくりひろげられる」とみるならば (M. 493)、「世界には一種類の因果性しかないことになる」(M. 494)。しかしながら、「ほぼ一世紀前より普遍数学の希望」は断念をよぎなくされ、いまや「生物学、心理学、社会学」といった (M. 488)、「諸々の新しい科学が構成された」(M. 474)。そのように「自然について、ひとつの科学ではなく諸々の科学がある」ことをうけいれた場合、われわれは「さまざまな経験の平面を区別する必要がある」だろうし、だとすれば、「諸事実の地平をはなれることなく」「感じとれないほどすこしずつ推移しながら」「物理的必然性から精神的自由へむかうこともできる」かもしれないとベルクソンは言う。かれはそうやって、「現象」の世界を超越した「叡智界の高みより「自由」をひきおろそうとするのである (M. 494)。

本節のここまでの考察からつぎのことが明らかになった。かつてベルクソンは、外的な事情ゆえに参照する必要にせまられたにすぎないカント哲学に自身の立場を対置するばかりだった。しかしその後、認識の質料と形式を区別しつつ自我の統一性に言及するカントに一定の評価をあたえるようになったベルクソンは、カントの語る空虚な形式をこえて自我それ自体に肉迫すべく、科学の複数性にもうったえながら自由と必然性のあいだのカント的な二元性を度合いの差異に変換し、さらには、そうやって一元化された系列に一から多への分散のシエマを適用することで、カント的枠組を持続や直観といった自身の術語によってパラフレーズする可能性をみいだす。

カント哲学とのこうした積極的な対話の反響は、年代的にはすこしおかれて主要な著作からもききとることができる。ここでは、まず論文「形而上学序説」を、ついで『創造的進化』のいっそう重要な箇所をとりあげる。

二・五・一 「形而上学序説」

「形而上学序説」にも、科学の複数性に言及しつつカントを批判する一節がある。

『「純粹理性批判」を注意ぶかくよめば、「カントにとつての科学」が「普通数学」に、すなわち、「まえもって用意された網に現実の全体をと同じこめる」「諸関係のただひとつの組織」に相当することがわかる (P.M. 1428)。しかしながら、ベルクソンによれば、科学、すくなくとも「現代の科学」は「ひとつでもないし単純でもない」。たしかに、現代の科学もまた「明晰な」「諸々の觀念に立脚する」とはいえ、それら觀念はじつのところ、「使用されるにしがって徐々に」、適用対象が「反射によってはねかえす光」のおかげで「明晰になった」にすぎず、その意味で、「ある概念の明晰さとは、これを

有益なしかたで操作できるといふ、ひとたびえられた確信以外のなものでもない」とベルクソンは言う。さいしょのうち「漠然と」して、「すでに」うけいれられている諸概念となかなか相容れない「諸々の観念が、「たがいにこすりあうことよってかどを丸めつつ、どうにか折りあいをつけるにいたる」(P.M. 140)。ベルクソンの考えでは、科学の実態とはそのように、単一な組織というイメージからはおよそほどとおいものである。ここからは、「心理学講義」や「心理・生理平行論と実証的形而上学」にみられた観念の反響を、とりわけ後者のそれを、たしかにききとることができる。

## 二一六・二 『創造的進化』

『創造的進化』には、ベルクソンが自身の「直観」概念をカントの哲学体系の延長線上に位置づける、興味ぶかいくだりがある。

『創造的進化』最終章で、独自の視点にたって古代ギリシア以来の哲学史を概観しつつ、ベルクソンは「持続」概念とこれにそくした直観とによるみずからの立論の革新性をほこる。ただし、かれはそのまっただき独創を自認するのではない。かつてカントは、「認識の質料と形式」を「区別」し、質料に「知性・外<sup>(13)</sup>」の、すなわち形式の外なる「起源」を「あたえた」。そのことをつうじ、じつはかれこそが「直観の高次の (superieur) 努力<sup>(14)</sup>」によって認識の知性・外の質料に身をすえる「あたらしい哲学に道をひらいた」とベルクソンは述べる (E.C. 797)。だが、カント自身はそのあたらしい道に「ふみださなかつた」(E.C. 798)。それはなぜか。

かれ「カント」は『純粹理性批判』において、物理的なものから生命的なものへ、生命的なものから心理的なものへとすすむにしたがって科学が徐々に客観性をうししない、ますます記号的になるとは判断しなかつた。かれのみるところで

は、経験はふたつの相異なる、おそらくは相反する方向に、すなわち、一方は知性の方向に合致し、他方はその反対という二つの方向に動いたりはしない。かれにとつて経験はひとつしかなく、知性はその拡がりの全体をおおう。まさにそれこそ、われわれのすべての直観が感性的だと、換言すれば知性・以下 (infra-intellectuelles) だと言うときにカントの表現していることなのである。[...] しかし反対に、物理的なものから生命的なものをへて心理的なものへすすむにつれて科学は徐々に客観性をうしない、ますます記号的になると想定してみよう。すると、記号化するためにも事物をなんらかのしかたで知覚せねばならないのだから、心理的なもの、あるいはより一般的に生命的なものの直観があり、それはおそらく知性によって移調され、翻訳されるが、それでも知性をはみだすことになろう。言いかえれば、知性・以上 (supra-intellectuelle) の直観があることになろう (強調は引用者による) (E.C. 798-799)。

対象領域におうじて科学の「客観性」が度合いを異にする点をおとしたために、カントは経験を一樣なものとみなし、けっきょく、直観的質料に形式としての知性を一律に課す認識論的枠組を経験全般に適用するにいたった。そういうわけで、かれは認識の知性・外の成分を指摘しておきながら、これに対応する直観を、「感性的」もしくは「知性・以下」の直観とは別個にみとめることがなかった。それにはたいし、科学の複数性をすすんでみとめるベルクソンは、経験が「一方は知性の方向に合致し、他方はその反対という」「相反する」「ふたつの方向」をとると考え、「知性・以下」の直観に加えて「知性・以上の直観」<sup>[15]</sup>を想定する。先述のように、『創造的進化』においては空間が知性の準拠枠とされるのだから、また、空間へとくだるかたむきが緊張する持続の反転とされるのだから、ここでいう知性・以下の直観は空間にそくした直観に、そして知性・以上の直観はベルクソン特有の持続にそくした直観に、それぞれあたるとみられる。そこで、一方で知性に従属する知性・以下の直観、他方で認識の知性・外の質料たる持続に身をすするべく高次の努力をおこなう知性・以上の直観、という言いまわしのうちに含まれる上下もしくは高次低次の対立に着目して、こう言うことができるだろう。ようするにべ

ルクソンは、心理より生命、生命よりも物理と、いわば低次の質料にますます適した空間的直観を知性にちかづける一方で、心理にもっともふさわしいもうひとつの直観を知性の対極に措定し、高次の質料ともいうべき持続にそくしたこの直観をたずさえて、カントがひらいた道に、カントに反してふみだそうというのである。

このように、『創造的進化』においてベルクソンは、認識の質料と形式を区別する点でカントを評価したうえで、科学の複数性に言及しつつカント哲学に内包された着想を独自に展開して、形式としての知性をこえる高次の質料にそくした直観を導きだす。この議論は、うえで検討した「心理学講義」や『純粹理性批判』についての講義、「心理・生理平行論と実証的形而上学」のいずれともよく響きあう。

## 結語

ベルクソンは『試論』で、統一の原理としての持続と、知性の準拠枠ともなる分割の原理としての空間をきびしく峻別し、やがて二〇世紀初頭には、知性とは対照的な持続にそくした認識方法として「直観」概念を提示する。しかし他方で、かれは『物質と記憶』以降、度合いをつうじた両原理の接合にもつとめており、その努力は「形而上学序説」をへて『創造的進化』にいたり、一なる持続から多なる空間への分散のシエマに結実する。

この変化はカント哲学との対話の産物ではなかったか、というのが本稿の冒頭で提起した問いであった。この問いにこたえるのは第二節の考察である。当初ベルクソンは、それ自体としての自我を睿智界にまつりあげるカントに自身の立場を対置するばかりだった。しかし、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、自由と必然性のあいだの二元性を度合いの差異に交換しつつ、カントの言う自我それ自体を多様な現象へ分散する統一性として鍛えなおしたベルクソンは、それに自身の「持続」概念を重ねあわせ、知性とは対照的な認識方法である直観をこれにあてがおうとこころみる。

したがって、上述の変化はカント哲学の批判的受容と表裏一体であったとみることができる<sup>(16)</sup>。カントとの接点を本格的にもとめたとき、持続と空間の厳密な二元性は二元的世界観の修正のためにおのずと解消された。「持続」概念を練りなおし、一なる持続から多なる空間への分散を語ることは、同時に、自身の術語体系をカント的枠組の延長線上に位置づけなおすことを、またそうすることによって、カント的枠組をふまえつつ物自体への通路をひらくことを意味したのである<sup>(17)</sup>。

## 凡例

ベルクソンの著作からの引用は、以下の略号とともに頁数を○内にしるす。

*Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991 (1959<sup>(18)</sup>).

D.I. … *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889.

M.M. … *Matière et mémoire*, 1896.

E.C. … *L'évolution créatrice*, 1907.

P.M. … *La pensée et le mouvant*, 1934.

M. … *Mélanges*, André Robinet (éd.), P.U.F., 1972.

C-I, C-II, C-III, C-IV. … *Cours L-JV*, Henri Hude (éd.), P.U.F., 1990-2000.

C. … *Correspondances*, André Robinet (éd.), P.U.F., 2002.

## 註

(1) Rose-Marie Mossé-Bastide, *Bergson éducateur*, P.U.F., 1955, p. 352.

(2) ベルクソンとカントの比較研究は年代順に以下の順序である。Françoise Fabre-Luce de Gruson, “Bergson, lecteur de Kant,” *Les études bergsonniennes V*, P.U.F., 1960, pp. 169-190. Madeleine Barthélemy-Madaule, *Bergson, adversaire de Kant*, P.U.F., 1966. Michel

Piclin, "Bergson, la transcendence et le kantisme," *Les études bergsoniennes* XI, P.U.F., 1976, pp. 87-113. Bernard Bourgeois, "Bergson et l'idéalisme allemand," *Bergson : Naissance d'une philosophie*, P.U.F., 1990, pp. 139-157. Alexis Philonenko, *Bergson, ou de la philosophie comme science rigoureuse*, Cerf, 1994. Monique Castillo, "L'obligation morale : le débat de Bergson et Kant," *Les études philosophiques*, 4, 2001, pp. 439-452. Jean-Michel Le Lamou, "L'anti-idéalisme de Bergson," *Les études philosophiques*, *op.cit.*, pp. 419-437. Frédéric Worms, "L'intelligence gagnée par l'intuition? la relation entre Bergson et Kant," *Les études philosophiques*, *op.cit.*, pp. 453-464. 筒井文隆『ベルクソンとカントの社会論』近代文芸社、二〇〇二年。杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』創文社、二〇〇六年。戸島貴代志『ベルクソンと一八世紀哲学—ルソーとカントを巡って』『ベルクソン読本』法政大学出版局、二〇〇六年、一五一-一六〇頁。

(3) 註二にあげた先行研究はいずれも、これら新資料を積極的に活用してはいない。

(4) したがって、以下で問題となるカント哲学はあくまでベルクソンが解釈するかぎりのそれである。原典を参照しつつ、その解釈の妥当性をあらためて問うことは本稿の目的をこえる。

(5) 一なるものから多なるものへの分散というこの発想を、ベルクソンは一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、プロティノス哲学より—ただし、プロティノスの構図の反転をへて—汲んだとみられる。拙稿「ベルクソンによるプロティノス哲学の受容—一なるものと多なるものとの関係をめぐって—」(東京大学美学芸術学研究室紀要『美学芸術学研究』、二六号、二〇〇八年、五六-七七頁)を参照されたい。

(6) ベルクソンは折にふれて、一九世紀後半から二〇世紀初頭のフランス哲学がカントの影響下にあったこと、および、自分だけはそのかぎりでなか—た—とを証言している(P.M. 1269-1270, 1393, C. 348)。シュヴァリエが書きとめた対話の記録(Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Plon, 1959, p. 23, 37-38, 231)もあわせて参照された。

(7) Charles Du Bos, *Le Journal, Contéa*, 1946, p. 64. また『ベルクソン講義録』の編者ユードも、アンリ・グイエからつたえ聞いた話として、「ベルクソンが博士論文の完成寸前に、まったく沈黙のうちにとおりすぎるならば不都合が生じる、あるいは危ういことになる」と気づき、この数頁(『試論』一五一-一五四頁)をあわててつけ加えた「エピソードを紹介している(C.ii, 465)。

(8) 九頁にわたる当該箇所は、講義全体の約三割に相当する。

(9) 自由の度合いという論点それ自体については、すでに『試論』において言及がなされている(D.I. 109-110)。

(10) カントによる認識の質料と形式の区別という論点については、学位請求のための副論文「アリストテレスの場所論」(一八八九年)

や (M. 51)、国際哲学会議での報告「因果性へのわれわれの確信の心理学的起源についてのおぼえ書き」(一九〇〇年)のなかでも (M. 419)、すでに言及がなされている。しかし、これらにはカントを積極的に評価する視点が欠けていた。

- (11) カント哲学に言及する文脈において自我それ自体を「生きた統一」とよぶ用語法は、すぐあとで考察する『純粹理性批判』についての講義」のほか、エジンバラ大学でおこなわれた「人格」についての「一の講演」(一九一四年)にもみとめられる (M. 1061)。

なお、その「生きた統一」の内実については、すぐあとで検討する『純粹理性批判』についての講義』において詳細に論じられている。

- (12) コレージュ・ド・フランスにおける「時間の観念の歴史についての講義」(一九〇二・一九〇三年)のなかでも、ベルクソンは「一にして体系的な科学という着想」に拘泥するカントを批判し、「さまざまな科学」の差異をみとめるべきことを主張したようである (M. 578) (ただし、この講義はいまのところ、聴講者の手になる要約が公にされているのみである)。また、カントの科学観が一樣に「機械論」的色彩に染まっていることを指摘する、ルクレールに宛てた一九〇二年七月の手紙もあわせて参照されたい (C. 74)。

- (13) ベルクソンの用語法、および、それとカントの術語体系とのあいだの関係について補足しておく。
- 第一に、ベルクソンはいくつかの箇所で「知性 (intelligence)」と「悟性 (entendement)」を無差別にもちいており、両者のあいだに差異をみとめないようである (たとえば、同一の段落中で両者を頻繁に交換する『創造的進化』の一節 (E.C. 664) を参照されたい)。ただし、使用頻度は「知性」のほうが圧倒的にたかく、かれの用語法のうえでは「悟性」よりも「知性」が基本的な術語であるといつてよい。

第二に、このことと関連して、ベルクソンはほとんどの場合、カントの術語体系において「悟性」にあたるものを「知性」とよび、しかもそのさい、これを自身の術語体系における「知性」の意味でとらえているようである。ただし、カントの術語体系において「知的直観」とよばれるものにかきつては、ベルクソンはこれをいわゆる物自体についての直観として理解しているため、「知的」を「叡知的」(叡知界にかかわる)の意味でとらえているとみられる。カントの術語体系に言及する文脈で物自体の直観を「知的直観」とよびながら、他方で自身の術語体系の場合によっては、カントの術語体系を独自に組みかえたものとしてのそれ—に言及する文脈ではこれを「知性—以上の直観」とよぶ、という用語法上の混乱がみとめられるのはそのゆえである。

なお第三に、ベルクソンは「理性 *raison*」という語はほとんど使用せず、それゆえまた、カントの術語体系における「悟性」と

「理性」の関係に言及している箇所はみあたらない。

(14) オックスフォードでの講演「変化の知覚」(一九一一年)のなかにも、カントが否定した「知的」直観」に言及する文脈で、「形而上学的な現実の知覚」を「高次の直観」とよぶ用語法がみとめられる(M. 896, P.M. 1374)。

(15) ベルクソンは、シュヴァリエに宛てた一九二〇年四月二八日の手紙のなかでも、カントに反してみずからが措定する直観を「知性・以上」と形容している(C. 906)。

(16) シュヴァリエは一九〇七年六月三日の対話の記録として、「カントは諸々の用語をこしらえたのであり、かれをうち負かすためにさえそれら用語からのがれられない」というベルクソンの言葉を書きとめている(Chevalier, *op.cit.*, p. 16)。

(17) ベルクソンは、自身のこうしたカント哲学の批判的継承のふるまいを―じつはある面でおおいに親近性をはらみつつも―ちょうどフィヒテとは対照的なものとみていた。この点については、拙稿「ベルクソンのフィヒテ観―ポスト・カントの哲学のあるべき姿をめぐって―」(『シェリング年報』、一五号、二〇〇七年、六五・七四頁)を参照されたい。

なお、ここでのベルクソンの方法の正統性および有効性にかんして、カントのがわの視座からあらためて検討する余地はあろうが、その点は本稿の目的をこえる。

(本稿は、二〇〇八年九月一三日開催の日仏哲学会秋季研究大会(於東京大学)における口頭発表にもとづく)